

田中香澄先生の人と業績

—田中先生のこと—

加藤 忠 男

ひとりの人間について、その全体像を中立的、客観的に要約することは不可能であろう。田中香澄先生についても事情は変わらない。筆者は先生の全人格、人柄のほんのわずかな部分に触れているだけである。したがって、この一文は筆者の限定された狭い視野から、折りに触れて筆者が感じたことを自由に記す以外にない。さもないと慈愛と厳格さと時間概念における少々の奔放さを湛えた先生の深い人間性を冒瀆することになる。本文は田中先生に対する筆者の私的なオマージュとしたい。

田中先生は昭和39年4月に本学に赴任された。それ以来40余年のあいだ本学ひとすじに教育と研究に尽力されたことになる。

赴任されて間もなく、大学の全共闘運動が熾烈さを増してきたのだが、たった一人の女性教員として先生がどのようなお気持ちで教壇に立っておられたのか、知る由もない。ただ、先生から7年遅れて筆者が本学へ勤務先を変え、初めて教授会に出たとき、先生の率直で忌憚のない発言が筆者の不安を打ち消したことは覚えている。前任校でも全共闘運動に影響を受けた学生はかなりいて、教官会議で審議が続いた。ある程度の弁護はしたものの、最終的には筆者の沈黙によって数名の教え子が犠牲となった。

こうした事情もあって、本学への赴任当初から、教授会での発言は決して控えないうという覚悟をしていた筆者は、田中先生の存在に安堵感をいただいたのである。

あれから三十数年、先輩として、また同僚として先生とは長いお付き合いとなったが、その人柄に触れるにつれ、筆者の人間観に強い影響をあたえたことは事実で

ある。あまり直接的な表現は避けたいが、それは筆者の情操と視界を広げ、人間が内部にはらむ空間の豊かさ、純粹さを気づかせるものとなった。文学作品の中にはときおり登場するが、現実にかこうした人間が存在するということに驚いたのである。

もっともこうした認識に至るまでには、それ相当の葛藤があり、ときには先生と激しい言葉の遣り取りもあった。「この人は、教師でいるよりカトリックの尼僧になったほうがよいのではなからうか。」と、苛立ちまぎれに思ったこともある。先生との話し合いになると、限られた現世の時間は無限に拡大され、現実的な時間と主観的な時間が交差して、ふしぎな世界にたどり着く。「先生と話していると、120歳まで生き長らえないと割に合わない。」と筆者は面と向かって毒づいたこともあるが、そう言いながらも、先生のもつ人間性に対する安堵感はずよく、その純粹さ、無垢で高潔な精神には圧倒されていたのである。

先生はドイツ語も担当されていたが、専門は美学・美術史である。筆者は専門外であり、その業績を辿る資格はない。またその論文で表現されようとしていることを筆者は正確に理解しているわけではなく、そのつもりもない。ただ田中先生という人間との接点の範囲内で、少し触れてみたい。

先生の出発点となっているものは、おそらく中世の神聖なる宗教芸術とその批評意識についてであろう。この問題はその後の先生の生き方に決定的な影響をあたえたのではないだろうか。逆に言えば、先生が元来もっておられた問題意識がこのテーマを引き寄せたのかもしれない。

先生はアウグスティヌスをめぐる論述の中で、次のように述べておられる。「宗教芸術を対象とする場合、美的芸術的価値以外に神学的宗教的価値の問題が絡むだけに、芸術の理論を越えたものと考えられ、美的芸術的価値のみから判断することには難しい問題がある…宗教的な表現を芸術品として分析しようとする場合、信仰の対象を美意識のみでは測り得ないことであり…聖なるものを象徴する形象の宗教的価値と美的芸術的価値の関係は、美の位相の問題からどのように考察されるべきか。」さらに音楽論のなかで、精神的な美、真理・理念としての美の把握と感覚的な美の把握は異なるものではあるが、これを総合的に捉えうる美学の体系を模索したい、美的芸術的自立性を標榜する批評と、靈的、内面的な美意識とが矛盾なく総合された批評体系を模索したい、と述べられている。

これが先生の問題意識であろう。それにしてもこれはいまだ何人も成しえていない難題であろう。ここで述べられている宗教的価値とは、われわれが旅に出た先で、その地の寺院に鎮座する塑像を美しい、と思うことでは当然ない。ここでは信仰者の内面が支える美的価値について述べられておられるわけだが、それにしても信仰とはあるものに対する絶対的帰依であり、いっぽう批評とはすべてを相対化することであろうから、そこに批評意識が介在する余地はないと思われる。しかし先生は信仰者の内面が支える美的価値と、それとは切り離され、自立した純粹批評から眺める美的価値とを統合する視野を目指されたのである。それはまさにサルト・モルターレになるか、ドン・キホーテの振る舞いなのか、決して先を見通した道ではなかったはずだ。

美的理念を理念として脇に置くのではなく、理念と自己感覚の融合とってよいのだろうか。もしこれに道筋らしきものを付けるとなれば、最終的には理念を自己の実存によって支える以外にないのではないかと思われる。そうなれば、芸術的価値の自立性を標榜する批評そのものに、ある種の揺らぎが生ずる可能性はあるが、これによって二つの相反する美的価値体系は接近していくことにはなるのだろう。

田中先生が全てを抱合する美学体系を希求された必然性のようなものを、筆者は臆げながら感じている。それは先生がカトリック信徒であるということだ。毎週定期的に教会へ通って、ミサを受けるということではない。おそらくそうした外面的なことにはあまり拘りはもたれなかったはずだ。信仰を支える（あるいは信仰に支えられる）内実に満ちた生活が重要なのであり、そこから見えてくる美の意識と、純粹芸術としての美の理念との統合を日常的に必要とされていたのではなかろうか。

もともと先生は東大理科Ⅱ類から美学へ移られた方である。実証的、客観的な視野と論証には慣れておられるはずである。事実その論文はきわめて精緻にして論証的であり、細密な曼陀羅図のようなおもむきさえする。そしてその発言となると、御自身の内にある思念と感覚の微細さを表現されようとするため、さらに細密さを増す。筆者などは微細な言い回しの渦に呑み込まれ、暗い森に一人残された気分になるほどである。もっともこれは筆者の論理性の欠如と信仰の欠如からくるものであろうが。

それはともかく、先生はある時キリスト教との最初の出会いについて、こんなこ

とを言われた。「宗教とか信仰とか、こうしたものはとても曖昧でしょう。曖昧なものに近づく気はまったくなかったの。徹底的に拒否しました。」もともと理知的、理念的でありながら、同時になにごとに対しても誠実に対処し、自らにごまかしを許さない人間が「曖昧な宗教とか、信仰とか」いう底無しの深みにはまったのである。生きていくためには価値の整合性を求めざるを得ないのではなからうか。

先生との接点を深めるためには、お書きになったものをいま少しなぞり続けるしかない。

『リルケ序論 実存—この唯一の生と死—』の冒頭は、リルケ論としてはきわめて珍しい書き出しとなっている。矢内原伊作の詩文〔挽歌〕を冒頭に提示されているのだが、これは第二次世界大戦で南方の海に散った戦死者（学徒出陣兵）を悼む矢内原の鎮魂歌とでもいうものだ。さらに『ドイツ戦没学生の手紙』、『きけわだつみのこえ』等のことが先生の頭の中にあっただようだ。書く動機の必然性というものに筆者はこだわるのだが、リルケ論としては異例なこの書き出しに、先生の内的必然性、書く動機の核心が垣間見られるように思われる。

十九世紀末という、いわゆる世紀末の精神的不安と動揺は二十世紀に入って、まさに現実の嵐となって吹き荒れることになった。二度の世界大戦を経験した世界は、しかし悲惨な経験を「形式的な追悼儀式に囲い込むことで過去のものとして葬り去ろうとしている…〈8月は残酷な詩の季節／空しく死者を記念する虚偽のとき〉（矢内原）と成り果て、新たに地域戦争という装いをほどこして凄惨な死を事も無げに繰り返している。」

先生は、このようにリルケ論としては必ずしもそぐわない現実の生々しい問題を胸に秘めて書き出されている。こうした現代の状況のなかで、存在への問い、生の根源への指向を試み、いま一度生と死に内実を与えようとしたリルケの生き方を対置させることで、先生はご自身の生き方と研究姿勢とを再確認しようとしているのかもしれない。

すでに触れたように、田中先生は抽象的、理念的な志向を極限まですすめられる資質をお持ちのようだが、いっぽうでは、敬虔な信仰の人であろうともされている。しかし理念的なものと信仰との間に容易に乖離を認めようとはされない。常識的に考えれば、そこに断絶という深い溝が想定されるのだが、先生はここに橋を懸けよ

うとされているように思われる。あるいはこの二つを大きな循環の輪で繋ごうとされているようだ。誤解をおそれずに言えば、抽象的理想的な思考形式のなかに、魂というすでに死語に近いものを対置することでご自身の世界を統一的に把握されようとしているかのようである。それは、先生がハイデッガーの『存在と時間』におけるリルケに関する部分で、以下のように触れておられることから推察できる。少し長いが引用する。先生の表現はきわめて論理的でありながら、いくつかの概念の絡みあう総体をひとつの文の中へ一挙に放出されようとするため、これを要約するとかえって冗長になりかねない。

「ハイデッガーは、単に彼リルケの詩の解明に留まることなく、むしろ現実において苦悩し飽くなき追求を試みる強靱な精神と豊かな感性とからなるリルケの人間像とその内奥から固く結実したそれらの詩の作品のありかたそのものの中から、世界の「存在と時間」の構造と人間の「実存」の真実を解明する手がかりを得ることによって、自らの哲学の構築の根底にリルケの存在を確固たるものとして措定している。詩人リルケの存在への問いや生の根源への志向が「詩」という彼独特の Ding としての明確な形象をもって詠まれたとき、理性をもって応ずる理論の抽象の世界にあってハイデッガーは内なる充溢のみなざるのを強く感ぜずにはいられなかったであろう。」

つまり抽象とは、単に美しい抽象に留まるのではなく、その背景はこの唯一なる生と死、人間的な内実、喜びと苦悩、別の言葉で言えば、「実存」に裏打ちされていなければならない、ということであろう。

よく引用されるリルケのことばに先生も触れられている。詩は感情ではなく、体験であり、一行の詩を書くためには多くの体験と忘却を重ねなければならず、忘却の彼方からふと浮かびあがるまで耐えなければならない。追憶が内面で血となり、眼差しとなり、身振りとなって、もはや自身と区別がつかないものとなった時、詩の最初の言葉が生まれる。一つの言葉もその内なる魂との共振なくしてはまったく存在しないに等しい、と。

本文の始めに述べたように、田中先生の問題意識は、自立した芸術それ自体に関わる美意識と、内面的、霊的、信仰に関わる美意識とが矛盾なく総合される批評体系の模索、つまり理念と感覚とが乖離しない統合された視点ということであった。

これを取えて言えば、客観と主観とが総合される視点の模索ということであろうか。ほとんど絶望的な課題ともとれるが、先生の誠実な生き方、そして信仰の問題がからむだけに、先生にとっては切実な課題であったことだろう。そして先生はそれを体現すべく、これまで努めてこられたのである。

本文がきっかけで、久しぶりに先生と仮想の対話をし、いつものとおり堂々巡りに終わった。これ以上の先生との対話は、ここでは気力、体力のうえで無理がある。田中先生を不慣れな〔先生〕と呼ばせて頂いたことは本学の風習には合わず、これだけでも肩に重みを受け、疲れが増したような気がする。疲れはしたものの、先生がどうやら理念、抽象を人間の実存で満たすという方向へ向かっておられたことは確認(?)できたようだ。ご自身の内面を理念で支え、理念的なものをご自身の内面で支え、二つのものを統合されようとされていることは、先生の日常生活から推察はしていたのだが。

それにしても、美学・哲学の専門家を相手に、用語の概念規定もなくこうした文章を書いたことを恥じている。

さて、このあたりでコーヒー・タイムとしたい。

ここで本文を締めくくればよいのだが、そうすると田中先生がまるで聖女であるかのような印象だけをあたえかねないので、先生の日常の振る舞いを少し点描しておきたい。

先生はオペラ歌手の追っかけをされたり、旅行、飲み屋でのお喋りなど、結構われわれと同じように人生を楽しまれてもおられる。ただ先生と時間の約束をすることだけは、ある程度の覚悟がいる。必ず遅刻されるということではないが、たいていはやや時間に遅れて、息せき切ったどり着かれる。ときに不愉快になることもあるが、慣れてしまえば問題はない。約束の相手がたとえ聖なるキリストであれ、遅れて来られることに変わりはないだろう。

弁解なさらないが、遅れの理由はじゅうぶん推測できる。先生は目の前に人間がいれば、たとえどのような人であれ、その人に対して全力を尽くして対応される。まさに内実に満ちた対応である。こうした姿勢には、しかし時間の限定などはない。その結果つぎに控える約束の時間に遅れることになるのだが、そこでまた

内実に溢れた対応をされるのである。こうして先生の誠実さが順繰りに遅れを生んでいくことになるのだろう。最後の約束を果たすためには、先生には天国でのキリストとの対面を数十年は先に延ばしていただく必要があるだろう。

このような遅れに関しては、例えば成績伝票のような提出期限のある事務的なことでも同様である。しかし筆者の怠慢とは違い、先生の場合は学生教育に対して全人的に当たられた結果である。すでに触れたように、先生は人を選ばず、目の前の人間に対して内実に満ちた対応をされる。学生が百人いようが、先生はその一人一人に対して個性をもつ人間として徹底的に対応される。その結果、提出期限の遅れで事務手続きに支障をきたすことにもなる。つまり先生の真摯な教育は忍耐づよい事務方との共同作業とも言えよう。

学生が書いた一枚のレポートを、それがどんなに短いものであれ、学生のそれまでの人生の集大成として扱われ、場合によっては書き直しを指示されたうえ、そうした歴代のレポート類を大切に研究室で保管されている。学生の努力の結果であるレポートを廃棄することは、おそらくその学生を廃棄するよう感じられるのであろう。最近、それらをご自宅へ運び込まれているようである。

ご自身の教室で関わった学生だけでなく、ふと目に留まった学生、特に学内で途方に暮れているような学生にも、先生はできるかぎり声をかけて、その生活や悩みを知ろうとされていた。そうした学生の中には他ゼミからはぐれた学生や先生とは教育上の接点のない強度の小児麻痺をかかえた短大生などもいて、ときには私的援助もされていたようだ。

毎年クリスマスになると、先生は私財を投じて驚くほど多数の学生を瑞穂会館へ招待し、これまた驚くほど豪華なクリスマス・パーティをされており、さらに美術史の授業で学生が制作した作品を市川駅前の画廊をかりて展示もされているが、これも私財によるものだ。筆者はある時、「定年も近いし、退職後の生活もあることだから…」と諫めたことがある。すると先生は言われた。「学生あつての自分、学生に生かされている自分、だから学生に少しでもお返しがしたいの。本学で教壇に立てたことを誇りに思っています。」その眼差しは充足感にみちていた。

こうした心情とは不釣り合いのようだが、教授会の発言ではいかなる場合でも臆する様子は見せられなかった。お書きになる文章と似た言い回しがあって、必ずし

も全員が理解したわけではなかったが、納得がいかないとき、あるいはある種の曖昧さの下に隠れているものを直観的に感じ取られたとき、特に上段に座る人たちに対しては徹底的に対抗され、口を閉ざされなかった。誹謗、中傷を受けないよう、適当なところで納めるように、と先生に進言したこともあったが、「気づかって頂くのはありがたいですけど、私は大丈夫ですよ。」と、明るい顔で答えられ、気になさる様子はなかった。内なる声にしたがっておられたのであろう。その発言にブレはなく、発言の根底はつねに学生の側にあったことは確かだ。

筆者も二人で話しているとき、やり込められたことが何度かある。この先生は相手の話を聞かない人かな、と思ったこともあるが、あるとき筆者が身近な人間の感動的（悲惨？）な話を延々としていると、先生は黙ったまま頭をさげておられた。眠ってしまったのかと思って顔を覗くと、静かに涙を流されていたことがある。

先生は教育の効果を固く信じておられ、手を抜くことを自らに許さない潔癖さがあったが、これはご自身の存在意義でもあった。当然ご自身の研究テーマに対しても、同じ潔癖さをもって邁進されたかったはずだ。しかし筆者は直接先生から、ご自身の研究生活に厳しい評価をされていることを知った。学生という人間を目の前にすると、そこから一瞬でも目を背けて自らの研究に没頭することを潔しとしない感性をお持ちであったのだろう。「一つの言葉もその内なる魂との共振なくしてはまったく存在しないに等しい」わけだから、個としての学生ひとりひとりに対して、教育という一つの言葉に全人格を投入されていたのである。

もともと先生の研究テーマは神的な美的理念（客観）と内面的な美（実存）との統合、あるいは循環的な融合であったはずだ。先生の場合、研究は単なる研究に留まるのではなく、その視界の内にはご自身の生き方も映っており、その研究を内実で充溢させることで始めて研究となったはずだ。意識されていないのかもしれないが、先生は研究を実践され、研究を生きられたといえよう。

卒業生ばかりでなく、先生の周辺にはヨーロッパ在住の外国人もかなりいるが、その人たちも先生の人間性とその隠された善意には驚嘆の念を隠さない。「われわれ、キリスト教国では彼女のような人に出会うことはまずない。日本にはこうした人間が多いのか。」と尋ねられたことがある。

教育が量を対象とするようになって久しい。人間は喜びと悲しみをかかえた個か

ら量へ、パソコン画面の統計数字に置き換えられていく。先生はこう書かれている。「テレビは凄惨な戦場の死を映画のように放映し、われわれはそれを…傍観している。生と死はすでに内実のない即物的な光景へ変容」した。しかし、いまやメディアは凄惨な戦場の場面を放映することも止めている。すでに即物的な生と死の光景さえ、われわれの意識からは失われてしまっているのではないか。ほんとうのことは目に見えない裏側でことが運ばれるようになってきているような気がする。目に見える映像はすべてある種のカモフラージュの役割を担っているのではなかろうか。大衆の好みの反映であるテレビ視聴率の上位が企業の設定する価値基準をなしているが、その大衆は隠れた現代の神によるメディア操作の影響を受けており、すべてが単純化された構図で提示される。9・11テロ、対テロ戦争、イラク戦争、勝組と負組、そしていかにも肯定的に声高に叫ばれるグローバリゼーションの裏側で着々と進行していることは、貧困の拡大、貧富の差の絶望的な拡大なのではなかろうか。社会の不安定さが増し、そこに生きる羊の群れの一部が自暴自棄になって柵を乗り越えようとする動きがあれば、群れを柵の内に留めておくために、現代の神は情報の操作と威嚇によって制御することになる。二十世紀を跨いで二十一世紀にいるわれわれは、神の死にうろたえ内面の空洞化に不安を募らせた十九世紀末的な意味において、もはや人間ではなくなりつつあるのかもしれない。

こうした状況の中で先生は、人間の内部へ視線をそそぎ、個々の人間の喜びと悲しみを内面で受け止めながら、霊的なもので支えられようとする実存的な生き方をされようとしている。そうした意味では、先生という存在は二十一世紀という時代に対するアンチテーゼであろう。

いくつかの節目はあったが、筆者がこれほど長く本学に在籍できたことは、いろいろな意味で先生の存在に依るところがおおきい。